

生活科から総合へ

生活科で培った資質・能力は総合の学びにどのようにつながっていくのでしょうか。
2人の先生に教えていただきましょう。

自分たちでやっていいんだ！

—生活科と共通する子どもの心持ち—

東海大学准教授 ^{ほうらい き し こ} 寶來生志子

生活科や総合的な学習の時間を研究している横浜市立大岡小学校に担任で8年、副校長で2年おりました。低学年の生活科では、わくわく感、やってみたいという思いを大切に、「はてなをかいけつ、みんなでかいけつ」を合言葉に、みんなで「はてな」を出し合って解決するとよいことを体感できるようにしていました。

その後、横浜市こども青少年局幼保小連携担当に異動になりました。5年間在籍していましたが、そこで、素敵な保育をしている先生方、子どもたちの姿にたくさん出会いました。校長として現場に戻り、子どもたちと出会いました。とても明るく素直な子どもたちです。ただ、先生の指示することに素直に従っているように思いました。

素敵な園では、「先生、〇〇してもいいですか」という声は、聞こえてきません。先生方の「早くしなさい」など、急かす言葉や怒る声もほとんどありません。ゆったりした時間のなかで子どもたちは遊び込んでいました。廃材コーナーを設けて、子どもたちが好きな時に自由に使えるようにしていました。

こうした経験から校長に赴任するにあたり、自分で考えて自分で選んで自分で行動する、「子どもたちが主役の学校を創りたい」と改めて強く思いました。

まずは、全ての学年で子どもたちが自分の思いや考えを安心して表現できる人間関係を大切にしました。そして、子どもの「やってみたい！」という気持ちを引き出し、それを実現できるよう先生たちが支えていくようにしていきました。

入学した時から、自分が「はてな」と思ったことをクラスみんなで解決していくことが学ぶということだと実感していくと、その後も失敗を恐れずに様々なことに挑戦していく子どもに育っていきます。「自分たちががんばって対象に関わっていけば、必ずよいことが起こるぞ」という手応えが次の行動の意欲になり、学びに向かう力を育んでいくことにつながります。「自分たちでやっていいんだ！」を実感していきました。

1～2年生の子どもたちは、学び方を学んでいる時期だと私は考えます。生活科の学習を中心に、子どもの考えるチャンスを奪わないで先生が支えることが、総合的な学習の時間で大きな力になっていくのではないのでしょうか。



寶來生志子

横浜市小学校教諭、同市こども青少年局担当課長、同市小学校校長を経て、2023年より現職。光村図書「せいかつ」教科書編集委員。

「小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 生活編」の作成協力者。

著書に、『育ちと学びを豊かにつなぐ 小学1年 スタートカリキュラム&活動アイデア』(共著・明治図書出版) などがある。